

た中世以前の都市空間の発展方法から都市計画の現代的課題を解決する為のプロセスを提案した点に注目したい。

#### 抄録

第一部「理論」では、「カーフリー都市」の計画とデザインにおける理論的な問題を考察している。まず、価値判断に基づかない活動はあり得るか、どの価値観を優先すべきか、建築は芸術か、デカルト的世界観の限界など、私たちが、何を、どのように建設するかに大きな影響を与えている価値と哲学について検討している。続いて、都市をデザインする際に直面するさまざまな分析の軸（オーダー（表面的な整理）とオーガニゼーション（体系づけられた整理）、ヒューマンスケールと工業規模、ヒエラルキーとネットワーク、個人主義と共同体主義、幾何学的形態と自然なパターン、直線街路と曲線状街路、形態と機能など）を提示し、写真や図版を用いながら簡潔に説明している。これらの中でも、著者は、オーガニゼーションを犠牲にオーダーを追求したために、都市のデザインが貧困化したのではないかという考えに基づき、オーダーとオーガニゼーションという分析軸について詳述している。

第二部「準備」では、第四部で述べるデザインのプロセスの前に完了しなければならない都市計画のプロセスについて記述している。この章で取り上げられているのは、デザインを束縛することが多い事項で、プランナーやエンジニアと実のある議論をするために、デザイナーが知っておくべきものだ。地区の最終的なデザインに影響を及ぼす要素である旅客輸送や貨物輸送、道路の舗装や排水方法、エネルギー・電気・ガス・上下水道など、それぞれについて、どのような点を考慮すべきかが述べられている。

第三部「要素」では、心地よい総体としての都市をつくりだす要素を紹介している。「要素」として説明されているのは、高所からの眺め、四階建ての建物、都市街路、大通り、広い街路、狭い街路、ギャラリーとアーケード、広場、門、中庭、公園、水辺、主要建物、重要でない建物である。代替案を考える際の議論を助けたり、特定の場所に対するさまざまな選択が与える影響を理解しやすくしたりするために、図版や写真が多く用いられている。

第四部「デザイン」では、地区の居住者達が自らカーフリーの地区をデザインするためのプロセスが提案されている。専門家は助言を与える役割だけを担う。著者の提案するプロセスは3つにわかれている。「オークション段階」で、主要な広場や主要街路に面した土地等の地価の高い区画の購入者を決定し、「コマーシャル段階」で、その購入者が、まず地区全体の骨格となるデザインを決め、「ヴィレージ段階」では、まず社会的選好に従って「アーバンヴィレージ」が形成され、続いて「アーバンヴィレージ」ごとに、居住者がその土地の条件やニーズに合わせて徐々に細部のデザインを決める。

東京市政調査会 田中暁子・抄

## 火災

UDC : 614.84

### 高層建物のエレベータシャフトを介した煙流動

W.Z. Black : Smoke movement in elevator shafts during a high-rise structural fire

[Fire Safety Journal, Volume 44, Issue 2, February 2009, pp. 168-182]

#### 抄録

火災時における高層建物でのとくにエレベータシャフトや階段室などの縦ダクトを介した煙流動は、人命に関わる重要な問題である。しかも気象条件や、建物構造、空調設備などといった多様で複雑な要因による相互作用で、予測が困難である。本論文ではCOSMO (COntrol of SMOke) というネットワークモデルを用いて、これらの複雑な要因による影響度を評価し、設計や消防活動（給気加圧などの使用）に役立てるとしている。

モデルはいわゆる一般的な多数室定常1層ゾーンに近いものであるが、気象条件や縦ダクトの隙間の設定などがしやすいように工夫されている。計算結果としてもっとも多用している指標はNNP（中性帯高さ）である。またモデルの信頼性検証のため、CONTAM（NISTが作成した換気回路プログラム）の結果と各階の圧力値や流量を比較しており、お

よそ一致していることを示している。

各種要因による煙流動の影響度を評価したおもな結果を以下にまとめる。

1. 外気温度が中性帯高さに与える影響は1~2階分と、限定的である。
2. 縦ダクトの頂部における開口は、煙流動全体に大きく影響を与える。
3. 縦ダクトの周囲の隙間の影響は、それほど大きくない。
4. 縦ダクトの構造（壁への失熱が変わる）はわずかな変化しかみられない。
5. 建物が高くなると中性帯高さ（の比）が上昇する。
6. 給気加圧装置により、効果的に中性帯高さを押し上げることができる。（抄録者注：日本の高層建築には排煙装置が義務づけられており、同様の効果が期待できる）
7. カーテンウォールなどの影響は小さい。
8. 外部開口を減らす方が、中性帯を上昇させるので安全である。

抄録者注：著者は中性帯が高い方が安全と考えているが、実際は場合によりけりなので、他の指標とも合わせて総合的に安全性を検討してもらいたい。

清水建設 鈴木圭一・抄

## 建築歴史・意匠

UDC : 72.011

ボボリの郊外庭園-ルカ・ピッティからエレオノーラ・ディ・トレドへ  
Gabriele Morolli: Gli "Horti" Suburbani di Boboli. Da Luca Pitti a Eleonora di Toledo : 'Belvedere' Albertiano o 'Delizia' Vasariana?, [OPVS INCERTVM : Rivista del Dipartimento di Storia dell'Architettura e della Città: Università degli Studi di Firenze, Anno II, numero 4, Edizioni Polistampa, 2008, pp. 70-91]

#### 抄録者注

本論は、ピッティ宮のファサードの設計過程に関する新しい観点を提示する論文である。

著者ガブリエーレ・モロリはフィレンツェ大学建築学部教授で、古代およびルネサンスの建築理論書や古典主義建築オーダーを専門としている。本論では、ピッティ宮正面ファサードに見られる「葉をはがされた」コリント柱頭という特異な意匠を鍵として、そこから引き出しうるさまざまな推論に基づくファサードデザインを提示している。

ピッティ宮の原設計者は、何世紀にもわたってブルネッレスキだと考えられてきたが、近年にはそれはほぼ否定されつつある。とはいうものの、フィレンツェのパラッツォ建築の中でも最大規模を持つ重要作品にもかかわらず、その長い建設過程には不明な点が多く、今日もなおさまざまな議論が続いている。掲載誌OPVS INCERTVMは、フィレンツェ大学建築学部建築史および都市史学科の紀要だが、実は2006年に発刊された創刊号のテーマがまさに「ピッティ宮」で、そこにはピッティ宮関連の論考が10篇収められていた。今回抄録する論文はこの創刊号ではなく、「ルネサンスにおけるフィレンツェのパラッツォ建築」をテーマとする同誌4号に掲載されたものだが、要するに、近年まとめて発表されたピッティ宮に関する論文の内の、最新の1篇と位置付けることができよう。

本論の鍵となる「葉をはがされた」柱頭とは、もともとミケランジェロがラウレンツィアーナ図書館前室で用いたもので、この作品はオーダーが壁に埋め込まれ、柱と壁が拮抗するマニエリスム建築の代表作として知られている。それに類似する意匠がこのピッティ宮ファサードにも見られるのだが、実際にはこのファサードはルスティカの印象が圧倒的に強く、その柱頭はほとんど目立たない薄彫りでしかない。本論では、ともすると見落とされがちなこの小さな手がかりを出発点として考察を開始する。その考察過程では、多くの文献史料や絵画史料が分析され、また当時流動的だった政治的状況も参照されているが、特筆すべきは、具体的な形態から喚起されるイメージについての考察が、同時代の数多くの例との関連を含めて、想像力豊かに丁寧に積み重ねられている点だ。最終的に、ある決定的な結論が導き出されるわけではないが、その考察過程を通して、建築史研究というもの単に史料を分析するだけにとどまらず、豊かな想像力をも必要とする、複雑な思考の成果であることを改めて確認できる例として、ここに紹介したい。

なお、掲載誌のタイトル"OPVS INCERTVM (不確かな書)"には、謙遜の意が込められていると考えられるが、本論のように結論よりむしろ考察過程にこそ価値や魅力が見いだせる論文は、紀要だからこそ発表しやすいとも言える。このような場が確保されていることが、豊かな研究の蓄積につながるであろう。

#### ・抄録

本論は、ピッティ宮のファサードの設計者が誰かという、長年に及んでいる問題に対して、新しい視座からささやかな手がかりを提示することを目的としている。カトルメール・ド・クインシーの言葉を借りれば、古典主義建築の規則は厳格であるが故に、一つのトリグリフからさえドリス神殿のプロポーションの再構築は可能である。それならばルネサンスの古典主義建築の規則を信頼して、一つの断片的意匠からピッティ宮のファサード再考を試みようではないか。

このファサードの第一の特徴とは、桁外れな規模のルスティカ積みであり、これ自体は古典主義建築の言語からはかけ離れた性格を持つ。だがその一方で、上二層の窓の側面に特異な付柱がみられ、さらにその柱頭の上には四角く型どられた輪郭が見られる。この付柱は1400年代のフィレンツェのパラッツォで主流だった二連窓の小柱と考えるには規模の点からみて不自然だし、なにより、この柱頭に見られる「葉をはがされた」コリント-コンポジットという意匠は15世紀のものとは考えられない。

ピッティ宮が描かれた古い絵画史料は何点も残っており、そこから推定される1400年代の正面とは、三階建てで一階に三つの開口があり、上二層にはそれぞれ七つの開口があるというものだ。また、上二層の外装が未完だったようにもみられるのだが、実際、現存するファサードをよく観察すると一層の石が非常にごつごつしているのに対し、上二層は比較的平坦だという仕上げの違いが見られる。

ここで、この柱頭のデザインに基づく仮説を立てたい。ピッティからメディチに所有者が移ったことに伴い、1550年以降に工事が再着手されたとき、ヴァザーリが参画し、未完だった上2層のファサードを下層同様にルスティカで統一しつつも、「葉をはがされた」柱頭という当時の「新しい」意匠を取り入れたのではないだろうか。さらに、この柱頭の上に見られる石の輪郭の形やサイズから考えて、この窓がセルリアーナのスタイルで準備されていたことも推測できる。このように仮定すると以下のような解釈が成り立つ。つまり、そもそも「葉をはがされた」柱頭とはその四半世紀前にミケランジェロがラウレンツィアーナ図書館で用いたときには、古典主義建築に対するアイロニーを帯びていたのだが、それがピッティ宮では壮麗な正面ファサードのデザインとして採用されたということになる。

結局ピッティ宮では、このオーダーをデザインの核としたファサードは実現されてはいない。しかし、ポーの「盗まれた手紙」のトリックのように、この「葉をはがされた」柱頭は、過去になされた計画の証拠として、まさに正面ファサードに堂々と隠れているのではないだろうか。

横浜国立大学 菅野裕子・抄